

年別会員		三 年	二 年	大 正 元 年	四 十四 年	四 十 三 年	四 十二 年	明 治 四十 一年	會 長
加藤眞一	加藤眞一	加藤修一	加藤	加藤眞一	加藤	加藤眞一	加藤	加藤眞一	會長
牧野直基	山本亀吉	市村勇	正	再選	市村勇	市村勇	市村勇	市村勇	副會長
牧野清治正	牧野直基	牧野留吉	山本善三郎	再選	山本亀吉	山本亀吉	山本亀吉	山本亀吉	書計
加藤已之助	加藤西尾三郎門	牧野直基							賞罰員
市村勇	市村藤村正勇	加藤修一	加藤眞一						評議員
加藤勝	加藤勝	加藤勝							旗子
加藤左助	加藤左助	加藤松太郎	牧野留吉						喇叭手
四三二一組組組組	四三二一組組組組	四三二一組組組組	四三二一組組組組	四三二一組組組組	四三二一組組組組	四三二一組組組組	四三二一組組組組	四三二一組組組組	組長
加藤藤源立吉助治七	加藤藤源立吉助治七	加藤藤源立吉助治七	加藤藤源立吉助治七	加藤藤源立吉助治七	加藤藤源立吉助治七	牧野本善三郎門	牧野本善三郎門	牧野本善三郎門	源正七

會誌を發行したのは六ヶ年間、第六號で中絶しました。これは其當時の會長の意志にも依りましたが、第一時勢が長足の進歩して、最早各區別の青年會では、満足する出来ない時が來たのが、大なる原因であります。

從来本村には平井・持明寺に東校、西校の二校があり、隨て團體の統一が容易に實現の晩に達し得ない時代であります。然時代は須臾も停頓せず、進歩發達してます。ありました。大正六年、學校は村の中央部に新築となり、凡ての機關が統一されました。

後に吉川村青年園と改稱されました。

平井青年會功勞者故市村勇君

市村勇君は當市村孫右衛門氏の長男で明治二十一年の生れで、余とは一週りの年下たので、同區の間でも幼時の事は何も知らぬ。君が青年になつて、時弊を痛論して、自ら矯風の先驅者となり遂に青年會計立を計畫して、余か許に相談に來られたのが、知己となる最初であつた。君は意志堅固で、熱心で、勇往邁進の氣象があつた、特に寡言であり、情味ありで、村の人からも愛敬せられて居つた。明治四十一年平井青年會設立して、副會長に當選して始終活動をせられた。青年會の事業も現今より比較すれば、幼少のやうであるが、其當時にありては、斬然として他の追随を許さぬ程の、事業成績を立て、副會長より、不村青年會長より、何れも表彰せられたるも、君が熟誠の結晶であると云ふも敢て過言ではない。實際會務を處理するには、決斷、明確、會員を指揮するには情味濃いが、誰れ一人異論を言ふものか有りた、指導宜しきを得て、一會一丸となり、異体同心であつたりで、會の名聲も高まり、會誌の發行も出來た。丁年微兵僕す

査に合格して金澤の輸送隊に入營をなし、成績優秀で任務を果した人である。

君が守候力量は一青年會で認められたばかりでなく、一村の豫望もあつて二十七才で本村の助役に就職した。此の前途有為の青年も、不幸病魔のために職を辞して、家業に免め、徐に静養をなした。大正八年余が助役たりし時、君が英材を惜み、特に勧めて書記として共に執務した。管鮑無二の友であり、同好の事務であり、役場事務は著しく改善向上した。同年九月余は香港の一商店に招聘せられて辞職し、君は翌年二月に宿病のために辞職してゐる。南米三ヶ年静養しつゝ、家業にも励ましたが、固より健康体ではなく、卧床月餘にして、藥石其効なくあれども大正十一年九月三十二才を一期として易簾せられた。友は久々帰りぬ旅や松の面に盡前、一章を手向けぬ。今日昔年の青年會誌を抄録するに當り、七友を憶かの情、綿々として書き、せめても友情に報する一分にもと、此一章を書いたのである。

吉川村青年會小泉支部事業狀況

寄稿

今ヨリ約三十年前、幾多ノ先輩が、凡ユル艱難ニ耐へ、凡ユル苦痛ヲ忍ビ、如何ナル障害ヲ打破シテ、各自ニ與ヘラシタル職務ニ向テ、致々粘り強フ、最後迄奮闘努力シタル、此犠牲的精神、横溢セル尊キ愛國ノ血淚ニヨツチ、遂ニ當時世界隨一ヲ誇リシ、露國ニ大勝シタル彼、日露大戰直後、若イ衆ノ集リヘ若連中ニ青年會ト改メラル。日露大戰當時一家ノ柱タル傷キ人ヲ失ヒテ、後ニ残リシ老幼男女ハ、其日ノ生活ニモ苦難ヲ來シ、見ル目モ當ラレヌト云フ様ナル、惨メナル姿デアツタ、當時ノ若連中ノ

國ヲ思フ道ニニツハナカリケリ戰、庭ニ起ツモ起た又モシノ御製ヲ思ヒ、其ノ一家、叔護、其ノ他國家ノ干城トニテ零下何十度ト云フ、滿洲ノ原野ノ第一線ニ起ツ軍入ヘ、慰問金品募集等ニ一心不乱、ソレニ從事シタルハ大イナル力ガアツタ、非常ナル活動ノ結果、世間カラモ大イニ認メラルト共ニ漸次發達ス。戰後モ毎月一回乃至二回、全員集合シテ修養ニ勉メ、或ハ各自ノ體驗談、其他、意見發表ヲシテ、農作及風紀ノ改善ヲ圖レリ。

明治四十五年近ハ青年會ト稱セテレタガ、其後青年團ト改稱サレル、既々ト組織モ改善セラル、ニ從ヒ、益々發展セリ、亦毎月ノ例會ハ、會員宅ニテ開催セラル、ガ、幾多ノ不便大カリシ、其頃ヨリ會員中ニ會館建設、念が放レナカツタ何等ノ方法無ク徒ニ日ヲ過セリ。事幾年、大正七八年政洲大戰亂當時再び我國が聯合軍ニ加担シテ大勝利シタル記念トシテ、當時ノ會長外五六名ハ會員全員ヲ誘ヒ、青年會館建設ノタメ、各自が貰幾束カラ持ツテ、小泉農事實行組合作業場ニ集合シ、毎晚七時半ヨリ十時迄、毎年十一月ヨリ翌年三月迄、製繩ニ夜業ス。シカシ毎夜ノ事トテ一時ハ、殆ド不出席勝テ、村内ニハ非常ナル非難カヘアツタ、シカシ會長外五六名ハ、雪降ル夜ヲ毎夜會員ヲ誘ヒ、献身的努力ノ結果、他ノ會員も漸次其熱心ナルニ感化サレ、漸次出席數ヲ増シテ全員が出席シ、製繩高ノ競争ヲスル迄ニナツタ、出来上リタル繩ヲ販賣シテ得タル金額ハ全部基本金ニ積立トテ、其他の村ヨリノ補助金等ヲ積立テタルコト十幾年、ツ塵モ積レハ山トナル説ノ如ク、現在デハ其金額貰百数十圓トナツタ、コレモ當時會長ト行動ヲ共ニシタル五六名ノ隠レタル力大ナルモノガアツタ、現今ハ點燈料金ヲ集金シテ得ル報酬

金、違約金トラ基本金トシテ積立テイマス、
毎月一二回月例會トシテ會合、專ラ修養ニ勉リ、又農事研究會ヲ開催シテ、農作物ノ改
善ニ勉ム、毎月會員ハ五十銭ノ貯金ラナシ、退団ノ時全額受取ノ方法ハ保護者、
リモ好評ヲ得テイル、現在十數名ノ団員ハ例會ノ外尚一、二回モ會合シテ修養シ、討論シ
智識ヲ広メテイル、本村青年団ヨリ功績ヲ認ムラ表彰ガレテイル、終リ。

孝子傳

176.

本校ノ教育ニ就テハ、第一輯ニ全傳ヲ記述シ、現在、教育ノ方針ト方法トヲ發表シマ
タガ、其後二三ノ資料ヲ得テ、再び教育ノ項ニ増補スルコトニ致シマシタ。

學校沿革ノ圖解

熊田

吉川

平井

大倉

泉

簡易科小泉小学校 明治二十一年四月

平井清通校 明治六年十一月廿五日創立

習成小学校 明治十七年新校舍成ル 明治廿年三月三十日廢止

明治廿五年十二月十五日改名

公立簡易科熊田小学校 明治廿四年五月一日創立 明治廿四年三月三十一日廢止

二丁掛		冬島		待明寺		明治六年冬島守中小學校創立		明治十八年三月役場管轄変更ニヨリ豊知新校へ通學ヘ委託し 明治三十一年九月五日吉川西學校ニ通學トナレリ	
年度	校名	校舍廢立	就學歩合	管理者	教員	備考	備考	備考	備考
明治六年 十一月二十五日	吉川東尋常小學校沿革誌 清通小學ノ 創立	平井村 平等會寺内ノ 北坊ヲ併用	下川去 田 西大井	明治廿二年町村制実施ニテ小泉天倉ヲ東習成小學校ニ編入ス 明治三十九年四月新校舎落成ス 明治六年前後巨孝小學校創立 明治四十四年四月一日兩校ヲ合併シテ吉川尋常小學校ト改稱ス 明治廿五年十二月吉川西小學校ト改名 明治廿六年九月現在の校舎新築落成ス	此時小泉大倉ノ盈科校ヲ合併ス	明治十八年五月習成小學校ヲ待明寺ニ新築ス	明治廿八年五月習成小學校ヲ待明寺ニ新築ス	明治廿九年十二月吉川西小學校ト改名	明治十八年三月役場管轄変更ニヨリ豊知新校へ通學ヘ委託し 明治三十一年九月五日吉川西學校ニ通學トナレリ
大正六年 十一月二十五日	平井倉	平井村 学区広敷	加藤傳右門 加藤傳次郎 加藤四郎 加藤元	管 理 者	教員	備考	備考	備考	備考
明治六年 十一月二十五日	吉川東尋常小學校沿革誌 清通小學ノ 創立	平井村 平等會寺内ノ 北坊ヲ併用	下川去 田 西大井	明治廿二年町村制実施ニテ小泉天倉ヲ東習成小學校ニ編入ス 明治三十九年四月新校舎落成ス 明治六年前後巨孝小學校創立 明治四十四年四月一日兩校ヲ合併シテ吉川尋常小學校ト改稱ス 明治廿五年十二月吉川西小學校ト改名 明治廿六年九月現在の校舎新築落成ス	此時小泉大倉ノ盈科校ヲ合併ス	明治十八年五月習成小學校ヲ待明寺ニ新築ス	明治廿八年五月習成小學校ヲ待明寺ニ新築ス	明治廿九年十二月吉川西小學校ト改名	明治十八年三月役場管轄変更ニヨリ豊知新校へ通學ヘ委託し 明治三十一年九月五日吉川西學校ニ通學トナレリ
明治六年 十一月二十五日	吉川東尋常小學校沿革誌 清通小學ノ 創立	平井村 平等會寺内ノ 北坊ヲ併用	下川去 田 西大井	明治廿二年町村制実施ニテ小泉天倉ヲ東習成小學校ニ編入ス 明治三十九年四月新校舎落成ス 明治六年前後巨孝小學校創立 明治四十四年四月一日兩校ヲ合併シテ吉川尋常小學校ト改稱ス 明治廿五年十二月吉川西小學校ト改名 明治廿六年九月現在の校舎新築落成ス	此時小泉大倉ノ盈科校ヲ合併ス	明治十八年五月習成小學校ヲ待明寺ニ新築ス	明治廿八年五月習成小學校ヲ待明寺ニ新築ス	明治廿九年十二月吉川西小學校ト改名	明治十八年三月役場管轄変更ニヨリ豊知新校へ通學ヘ委託し 明治三十一年九月五日吉川西學校ニ通學トナレリ

二十一年	二十年	十九年	十八年	十七年
	簡易科 熊田小学校			新築校舎成 二階造建坪 三十六坪
創立 五月一日	熊田村 佐木孫左門 宅ノ借用	廢止 五月三十一日		
	吉熊平 二丁掛田田井			
	戸長 渡辺磯右門	戸長 加藤三郎右門 校務掛		福口長可成 高田清左門
	下氏家 宁康弥七重	細田 出生傳習所卒業 水落村平民 師範学校中等科卒業	三田村 授業生 精江士族	藤田七之助 武生士族 福井傳習所卒業 小曾戶覚藏 授業生
	五月学區改正ニ付校舎ヲ三十五圓ニ公賣 シ其金ヲニ村ニ平分ス 大倉村ハ簡易科小泉小学校（從來一村ニテ公立）ノ学區内ニ入ル 熊田村ハ之レヨリ先キ氏家川學校ニ組合タリ シカ是ニ於テ平井村等ヲ併セテ該村ニ			有志者ノ醵金五百円ヲ以テ校舎ヲ平井 村、西端ニ新築ヘ加藤四郎兵卫、大島 政右卫門等をモ周旋ス 落成式 三月五日 本村ニ校舎アル之ニ始コル
	簡易科 小学校ヲ公立ス			

二十六年	二十七年	二十八年	二九年	三十一年
本科正教員八円 士族 賛江・士族 本村漢三 士族 賛江士族 教育費百五十圓	卒業生二人 卒業員辭ス 三田村庄一人ニテ 教授ス	卒業員辭ス 喜吉三郎 士族 賛江士族 平井平氏 庄三國十二月	加藤傳右門 士族 賛江士族 平井平氏 庄三國十二月	本村正教員日暮九圓 四月五日辭令 黒田政吉 平井平氏 庄三國十二月
水害、生害 七月二十八日近藤本郎長本校ニ來リ縣賞ヲ	日清戰爭終ル 熊田區ノ学齢者二十名皆ソテ入學ナス	日清戰爭終ル 熊田區ノ学齢者二十名皆ソテ入學ナス	九月二十九日 黒田莊 賛江士族 平井平氏 庄三國十二月	九月ヨリ七月三十一日 村長竹内淇 士族 賛江士族 平井平氏 庄三國十二月
水害、生害 七月二十八日近藤本郎長本校ニ來リ縣賞ヲ	十一月十四日小松廣 士族 賛江士族 平井平氏 庄三國十二月	十一月十四日小松廣 士族 賛江士族 平井平氏 庄三國十二月	十一月十四日小松廣 士族 賛江士族 平井平氏 庄三國十二月	十一月十四日小松廣 士族 賛江士族 平井平氏 庄三國十二月

三十五年 二四九戸	三十四年 十八坪 二四八戸	三十三年 五六六戸	学区域 平井 大倉 小泉 熊田 吉田	学齢人員 男一一四人 女一三六人 就學者 男一七人 女五七人 歩合 男九 女四二四
就學者 男一〇八人 女六九人 計一四九人	就學者 男五九人 女十人 計一四九人	卒業生 男十八人 女四人	加藤四郎兵衛 (学務委員)	四月十四日 加藤学務委員 死亡
東井養育一郎 三月七日		学務委員子 九級上俸	五月一日 加藤四郎兵衛 (学務委員)	二月二十一日 加藤元右門 平井 平民 雇月給三圓
准訓導 加藤嘉津榮 五月二十二日	教育費 五月二十一日代用款 員 加藤元右門	教育費 三二三〇八	四月一日 土田訓導 九級上俸	三月二十二日 ヨリ三十六聯隊附近ニカケテ地震ノ中心上二 里ニ位セルが故ニ其上下動ノ激烈ナルニ逢ヒ 剝、餘震殆ド一ヶ間千百回ヲ経過シタルガ 為ツ後被舍、加キ益々歪傾ニ歪傾ヲ重ネ テ危険實ニ言フ可ラズ
丹生郡聯合運動會日琵琶山ニ催ス本校 五月二十二日	大有年 教育費 三七二・二五	三月二十二日 吉川両立、兩校ヲ合併シテ完全ナル 一小學ヲ新築セントヲ議決ス 九月十八日臨時村會ヨニ於テ吉川東尋常小 學校、増築ツ議決シ其長ニ東西兩校ヲ合 併セント又シ議ヲ取消ス 丁掛ヲ割キ吉川尋常小學校ノ學區ニ附ス 本校ノ借家分一九、五坪ヲ家主ニ還付ス 少シ浮塵子ノ害アリ	三月二十二日 午前一時ノ大地震ハ蓋シ本校 ヨリ三十六聯隊附近ニカケテ地震ノ中心上二 里ニ位セルが故ニ其上下動ノ激烈ナルニ逢ヒ 剝、餘震殆ド一ヶ間千百回ヲ経過シタルガ 為ツ後被舍、加キ益々歪傾ニ歪傾ヲ重ネ テ危険實ニ言フ可ラズ	三月二十二日 教育費 二七一・〇四

四十二年	四十一年	四十年
	戸小吉大熊平百。二坪五合 二、泉田倉田井 四五、一四、三九、七 〇、四二、一六	一。五坪 二五
	女男卒十十業一七生 女男就學者一三七三	女男卒業生一七人 女一三六人
大島政右門 學務委員	村長 加藤四郎兵工	村長トナ 佐木五平退職 五月 佐木五平退職 四月
渡辺玄來任 後任 西京づけ依頼退職 十月三十日 准制道加藤来任	土橋喜良校長転任 吉山貞策来任 代用教員垣内順助 西京へ	六月 代用教員梅田好文 解職 七月四日 代用教員垣内順助 來任 佐木玄來任 解職 八月 代用教員垣内順助 來任 西京づけ依頼退職 八月 准制道加藤来任 其他
		豊年 教育費 尋常五年級併置
		始メ六学年ヲ四キタルヲ以テ四年級ト ナリタメニ一教室不足ヲ見ルニ至リシラ以 テ児童溜サノ一隅ヲ圍にて教室セリ
		内俸給 備品 消耗品 八七、〇 六五、四六

三十九年	三十七年	三十六年
熊小吉大平 三、六戸	一。五坪 三五	
	計二一五人 男一三人 女一二人	卒業生 男一九人 女一〇六人
		卒業生 男一四四人
		村長トナ
		大島政右門
		三月三十一日 校長土田喜三郎 転任ス
		四月十六日 准制道加藤嘉津 依頼退職トナ トシテ赴任
		四月一日 土橋喜良校長トナ 古市光榮准制道
		三月三十日 校長土田喜三郎 転任ス
		七月三十日 奉戴式
		競争選手四名中三名受賞ス 九月十一日 貧窶生ニ学用品貸与給与開始ス
		八年

187.

明治十八年五月持明寺地籍字佃ニ校舎新築ノ工ヲ起シ同年八月ニ至リ落成工事掛ハ青山
新龙卫門氏ナリ一校名ハ習成小学ト改稱ス。此ノ時ニ當リ盈科小学區一小泉大倉ニヶ村
聯合校舎小泉村ニ設置イハ西大井戸長役場ノ所轄タルヲ以テ合併セリ、爾後明治二十二
年町村制ノ実施ト共ニ小泉大倉ハ分離シ一吉川東尋常小学區トナリ校舎ハ平井區ニ設置
一他ノ五區ヲ以テ吉川西尋常小学區トナセリ、教員ニハ千田莊藏民主席トシ、補助ニハ
友永誠ヲ初メトシ、関澤軍吉、五十嵐翠、藤澤徹英、五十嵐初治ノ諸氏ナリ。
明治三十九年九月五日ニ丁掛區へ豊村知新校ヘ委託シアリシモノ、本学區ニ合併セリ。
明治三十九年四月一日ヨリニ学級編制ヲ三学級ニ改ソ
明治三十九年四月二十日校舎改築工事ニ着手シ、九月一部竣工ヘ教室、宿直室、事務室
便所、十月八日ヨリ授業開始
抑モ本校々舎改築ノ動機タルヤ、年一年ニ就学兒童ノ増加ラ來シ、為ニ校舎狹溢トナリ
シテ以テ、明治三十四年三月二十六日、本村會ヘ村長友永元レハ本縣令第百六號小学校
設備規則ニ基ツキ、本校々舎改築ノ決議ラナシ、明治三十六年一月四日知事、認可ラ得。
明治三十六年一月四日敷地ヲ持明寺區宇雲宮ヘ現今ノ地ニシニ指定シ同年四月七日請負
入札ニ附シ明治三十八年十一月十二日ヨリ校地埋立工事ニ着手明治三十九年四月二十日
工事ニ着手シ明治四十年七月九日全部竣工セシモノナリ。
ユ事執行者ハ、本村長佐々木五平氏ニシテ、建築委員ハ、学務委員友永元氏ヲ初メトシ
上田庄兵、宜原彌三治、西野仲左衛門、加藤吉左衛門ヘ冬島、中村殆郎右エ門、青山

186

			四十三年
	明治六年 守中学校	冬島 五山嵐良尼門 松原吉郎右門宅 後移ル	就学生 男九十三 女百十四
		冬島 二丁掛 持明寺 西大井	卒業生 男十二 女十二
火災 明治十七年三月廿七日 酒井朝吾 長谷川平悟 清水小悟	下川去、田ニヶ村ノ公 立小学校下川去村ニ 設置シ巨左小学校 ト名ヅク 教員ニハ鶴江士族	五十嵐良尼門 五山嵐詩職後 ハ鶴江士族 千田莊藏	校長青山貞兼織田 転任 後任三上正隆來任 佐々木茂白山校ニ転 任林義光後任 吉江校ニ転任 六月渡辺すえを
	明治十八年三月聯合戸長役場、制トナリ 二丁掛ハ野田ノ長役場、所轄トナリ・他ノ三 丁村ハ西大井戸長役場、所轄トナリシラ以テ ニ丁掛村ハ分離シ他三ヶ村ハ巨左小学校區 ト聯合シテ持明寺徳法寺ノ堂宇ヲ借ル		四月

191.

近藤源七 静江
齋藤せん 山本文雄
前川弓也、輔 加藤嘉津栄
渡辺捨吉 齋藤
上野長太郎 稲田
孝久あじの 田辺ちの
上野彌太郎 辻藤喜助
天武中二の 伊藤吉之助
西野 算 伊藤吉之助

三月 七月 一月 十月 六年三月 四月 大正五年三月 九月
五月 六月 六月 九月 十一月 元月

本尋“准尋本”尋本尋本校本“尋本”尋本
正正 得准正 准正准正正 正 准正 準正

ニヶ月
一年六ヶ月
九ヶ月
一年二ヶ月
八ヶ月
三年七ヶ月
六ヶ月
二年一ヶ月
二年二ヶ月
一年一ヶ月
四ヶ月
一ヶ月
三ヶ月
二ヶ月
十三ヶ月

大正三年六月依願退職。
五年三月大野御野校
四年三月依願退職。
四年十月織田校へ
十二年三月大虫校へ

丹生郡吉野村余田
朝日村西田中
吉野村芝原
織田村平寄
吉川村大倉
吉野村水坂
官崎村寺
今立郡鰐江町
丹生郡官崎村増谷
吉野村本保
朝日村西田中
氣比庄
吉野村余田
今立郡鰐江町
吉野村本保
丹生郡本村西大井
吉野村余田
豊村和田

19

久守甚之助 氏名
牧野直治郎
永宮 義
丹竹葛久都吉野山橋
尾内保繁加藤三好
つた彰察原口本
金治藏と木群平
藏み理川舟ニ
とみ理川舟ニ
久守甚之助 氏名
牧野直治郎
永宮 義
丹竹葛久都吉野山橋
尾内保繁加藤三好
つた彰察原口本
金治藏と木群平
藏み理川舟ニ
とみ理川舟ニ

就職年月
四十三年四月
四十四年五月
四十三年十月
四十五年三月
四月
大正二年一月
大正二年三月
十二月
三年三月

“本代本准”本本“准”本尋本資
正用正教 正訓 正正正長格

在職期間

異動事項

大正三年四月叶莊領事館
出向リ命セラル
四十五年三月退職
大正四年三月三國校へ
四十五年三月福井高等小
大正三年依願退職
四十四年十一月退職
大正六年十月退職
四十五年十二月退職
四十四年四月
大正三年十二月福井旭校へ
ク三年三月依願退職
" 休職
大正五年四月退職
ク二年三月退職
" 六年三月王子保校へ
" 四年六月吉江校へ
" 七年九月依願退職

丹生郡萩野村櫻谷
吉川村下川去
吉野村永坂
吉川村熊田
福井市
丹生郡吉川村吉田
今立郡新横江村中新庄
栗田郡村
河和田村西袋
丹生郡天津村島寺
立待村西番
豊村野山
朝日村上川去
南条郡武生町
丹生郡白山村狹原
今立郡丹津村上鯖江
大野郡村岡村郡
丹生郡朝日村氣比莊

193.

藤井千代子	黒田澤と	前田惠	青木鶴秀	西岡すゞ	松加吉	川藤	木	栗津春江
大鷦	田澤と	鶴秀	た	原藤田	加吉	藤	上野彌太郎	児玉幸四郎
子	貞淇く	枝	た	道	木	木	下野彌太郎	上野彌太郎
	を	を	た	田	栗	栗	木	木
	治	治	静	田	津	津	下	下
	か	か	宣	田	春	春	新	新
	か	か	修	田	江	江	七	七
							木	木
							下	下
							は	は
							る	る
							東	東
							正	正
							七	七
							年	年
							三	三
							月	月
							大正	大正
							十年	九年
							八月	一月
							九月	十月
							十月	十一月
							十一月	十二月
							十二月	一月
							一月	二月
							二月	三月
							三月	四月
							四月	五月
							五月	六月
							六月	七月
							七月	八月
							八月	九月
							九月	十月
							十月	十一月
							十一月	一二月
							一二月	二月
							二月	三月
							三月	四月
							四月	五月
							五月	六月
							六月	七月
							七月	八月
							八月	九月
							九月	十月
							十月	十一月
							十一月	一二月
							一二月	二月
							二月	三月
							三月	四月
							四月	五月
							五月	六月
							六月	七月
							七月	八月
							八月	九月
							九月	十月
							十月	十一月
							十一月	一二月
							一二月	二月
							二月	三月
							三月	四月
							四月	五月
							五月	六月
							六月	七月
							七月	八月
							八月	九月
							九月	十月
							十月	十一月
							十一月	一二月
							一二月	二月
							二月	三月
							三月	四月
							四月	五月
							五月	六月
							六月	七月
							七月	八月
							八月	九月
							九月	十月
							十月	十一月
							十一月	一二月
							一二月	二月
							二月	三月
							三月	四月
							四月	五月
							五月	六月
							六月	七月
							七月	八月
							八月	九月
							九月	十月
							十月	十一月
							十一月	一二月
							一二月	二月
							二月	三月
							三月	四月
							四月	五月
							五月	六月
							六月	七月
							七月	八月
							八月	九月
							九月	十月
							十月	十一月
							十一月	一二月
							一二月	二月
							二月	三月
							三月	四月
							四月	五月
							五月	六月
							六月	七月
							七月	八月
							八月	九月
							九月	十月
							十月	十一月
							十一月	一二月
							一二月	二月
							二月	三月
							三月	四月
							四月	五月
							五月	六月
							六月	七月
							七月	八月
							八月	九月
							九月	十月
							十月	十一月
							十一月	一二月
							一二月	二月
							二月	三月
							三月	四月
							四月	五月
							五月	六月
							六月	七月
							七月	八月
							八月	九月
							九月	十月
							十月	十一月
							十一月	一二月
							一二月	二月
							二月	三月
							三月	四月
							四月	五月
							五月	六月
							六月	七月
							七月	八月
							八月	九月
							九月	十月
							十月	十一月
							十一月	一二月
							一二月	二月
							二月	三月
							三月	四月
							四月	五月
							五月	六月
							六月	七月
							七月	八月
							八月	九月
							九月	十月
							十月	十一月
							十一月	一二月
							一二月	二月
							二月	三月
							三月	四月
							四月	五月
							五月	六月
							六月	七月
							七月	八月
							八月	九月</

19

青 津田サダオ 茂 嶺崎キミ成 高橋甚兵卫
山 堀小加木北竹邵ヒサラ 赤松静子 向當久太郎 栗原清子 大越定子 清水 篠
下川イサラ 吉田清作 佐々木雅雄 寿
藤新七 藤馨

昭和四年二月
昭和五年八月
昭和六年三月
昭和七年三月
昭和七年五月
昭和八年三月

正准正 正准正

現 在 現 在 現 在 現 在
現 在 一 三 七 五 一 現 ツ 一 一 七 現
ケ ケ ケ ケ ケ ケ 年 年 月 月 年 月 年 月
年 年 月 月 月 月 五 月 七 月 月 月

昭和六年三月萩野校、
昭和七年七月退職
昭和七年八月磯部校、
一月三六、入營
昭和七年三月退職
昭和十年四月專攻科、
昭和八年四月王子保校、
昭和十年三月退職

‘師師師師講’師‘檢師師講’‘師檢
一一一壹一習 二 定一一習 二定

194.

堀竹内新太郎 山本ひなを 橋本武雄 小前田孝次郎
青山小橋山津高木山加藤 博 藤三齋 藤千恵子 加藤
青山本西野岸田島下本藤國 三村捨四郎 三角鹿すみゑ子
ト 東龍ミヨリ 治雄茂隆次子

大正十三年八月
十四年三月
九月
四月
十一月
九月
十五年四月
三月
九月
八月
昭和二年三月
昭和三年八月
昭和四年三月
昭和五年三月

“本尋”“本尋”“本尋”“本尋”“本尋”“本尋”
正正 正 正正正准正正 正

二年七月
一年四月
三年七月
一年五月
二年七月
一年五月
二年九月
一年四月
二年九月
一年五月
二年七月
一年五月
二年七月
一年五月
二年七月
一年五月

大正十五年蒲生校、昭和三年三月退職
大正十四年十二月足羽郡一乘校、昭和三年三月三留校、
七年三月越廻校、
昭和二年三月退職、豐校、
十年三月朝日校、
六年八月豊校、
五年三月惜陰校、
四年三月寧政科、
大虫校、
昭和五年十二月天津校、
昭和四年十二月城崎校、
五年三月國高校、
八年三月退職
六年三月殿下校、
七年三月吉野校、
上岬校、
七年三月吉野校、
師 師

師尋正一專二講 一 定一定講二譏

1960.	千葉スミ	昭和八年三月
青藤宗山 前田口 山本原 鶴忠增 丸健太	伊部信次 岩井登美子 佐々木こよし	昭和九年三月
同 同 同	渡邊俊支	昭和九年三月
昭和十年四月	田純	昭和十年四月
同	同	同
昭和九年八月	四月	同
十二月		
本淮本淮	正心正心	本正
現	現	六ヶ月
	五ヶ月	一ヶ年
狂	在	昭和九年三月依願退職
		織田校
昭和十年辞职	昭和九年八月辞职	、

師檢”師學東師中檢“師 師
洋 學
一定 一大二校定 二一二

義勇奉公

日露戰役より今年は三十週年に相當するので、何處にも記念の行事があつた。本誌に此の項を記載するのも、記念行事の一として數べきである。茲に當年從軍勇士の氏名を記録するに當りまして、これが叙事にもと思ひまして、戰役を詩託したものと記載しました。

明治三十七年二月九日帝國艦隊擊沈敵艦于仁川港

戰雲暗慘壓仁川，正是安危切迫天。可識自由行動後，砲聲一發制機先。
欲雲漠々湧波濤，磨劍十年士氣豪。天下詔勅命懲伐，仁川旅順戰勝高。
已制機先制海權，敗殘艦隊更蕭然。魚雷晚放自朝霧，擊破黃金山下船。
奈此東洋雲霧何，大詔煥發勳干戈。皇軍上陸仁川港，直略平壤驚劉羅。
邀擊洋中激戰生，敵軍亦勇若廬牛。舷々磨處憶元寇，直上虜船屠露兵。
敵彈雨下自沈舟，軍港塞來成妙籌。行勳堂々在決死，沈問一爆慘蒼鶻。
敗殘將士卧薪心，復出港頭如臥侵。我艦艦來更混亂，敵帥溺沒敵舟沈。
統聲湧矣砲聲夷，漠漠硝煙行步兵。自一虎山歸戎有，長驅頻陷九連城。
凜然意氣出初征，攘臂投鋤事砲車。遼水滿山彈道裡，露軍百萬一時除。
五月十四日送出征加藤伊太郎君
六月十九日上村艦隊者敵艦追尾中失艦影
出沒幾回不章傳，航行索敵北韓迎。未加一擊爲濃霧，咫尺濛々逸敵船。

八月十四日蔚山冲海戰

彼海賊船遺恨深、天人共怒鑿行心。

蔚山戰捷豈偶爾、二艦敗逃一艦沈。

江村寂不見鷄豚、關帝廟堂滿彈痕。

戰後王師更無犯、外民感泣狀國恩。

鞍山露陣勢形非、右翼辰門將包圍。

混亂胡虜成退却、遼陽城裡入皇威。

堅冰生鬚吹朔風、輕身重命戰遼東。

十一月三十一日南靈山臨落

又十一月藁靴製造有感
南靈高陣拂敵群、我兵瞰射愕城軍。

劉羅艦隊多沈沒、潔戰外洋無報君。

監視密輸與艦逃、東鄉艦隊一軍豪。

敵船全滅解封鎖、欲饗遠來珍客勞。

渾河對峙戰雲馳、風勁雪飛更監湖。

一夜前營開銳火、將軍惟惺見雄圖。

孤城落日砲無音、難奈將軍軍氣沈。

五萬餘人齊棄鏡、又無一箇男兒心。

掩堡砲臺用意深、郭園七里塹三尋。

王師善捷君知否、彼億萬心又一心。

掩堡砲臺用意深、郭園七里塹三尋。

王師善捷君知否、彼億萬心又一心。

又掩堡砲臺用意深、郭園七里塹三尋。

王師善捷君知否、彼億萬心又一心。

內喊震天巨砲轟、萬群面縛出蕃城。

滿州霞瑞千村陣、簞食蠶織迎我兵。

陣中作

明月耿耿照戰場、渾河對峙卧黃梁。

江村一夜吹蘆管、四十萬人望故鄉。

敵兵出子遼西、犯中立地襲吾側面。

堂々何不決輸贏、請看遼西漫動兵。

彼只破盟非戰罪、再平頑露奪牛城。

奉天大會戰

迅雷風烈是兵機、撫順奉天忽包圍。

不動如山疾如風、奉天制敵軍突不備。

鬼籌神算氣愈雄、奉天陷落一瞬間。

吾師戰略制機先、名譽退却無施處。

敵勁大軍守朔迎、十萬仇尸滿奉天。

左翼前馳驚虜兵、追擊烟生敵自爭。

波艦將過對馬瀛、五十萬人露軍散。

明察如神績如淵、滿洲唯看旭旗輝。

集中艦隊制機先、奉天陷落一瞬間。

烟籠滄海砲聲震、十萬仇尸滿奉天。

我海古今堪待處、追擊烟生敵自爭。

畫設巨彈夜魚雷、六艘捕獲廿艘沈。

海程一萬數千里、吊加藤富次郎君三豎。

死有餘榮即盡忠、昨春遠送吉川東。

衷情凜々懦文起、男子剛腸存此中。

199.

198.

201.

同 同 同 同 日 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
日 露 戰 役 從 軍

清

日 露

兩 戰 役 從 軍

同同同同冬同同同同同同熊同同同平
島掛田井
白石加加塙山天加加安天佐佐佐佐市加牧
崎内藤村藤野
川藤谷藤藤田谷木木木木
忠孫郎與仁甚小太
之房吉石右衛門三兵衛
助吉竹門門松門吉門吉衛郎作造門松郎郎

200.

男子剛腸在此中。膽如斗矣勇如風。
偏教村民思戰功。名聲噴々是英雄。
久在遼東今日歸。紅顏瘦處赤心肥。
平定胡虜奏凱歸。一家歡喜躍將飛。
誠忠是膽破虜兵。今日凱旋傳號令。
祝加藤豐三郎大佐之凱旋。盡那意即盡家意。
明治十年西南之役從軍。直擗新祖兒相見笑猶恐。
從軍奉公者名簿。萬死得
日清 日露 兩戰役從軍 西大井 吉本 勇助 正是春光花信節。白梅香。
日露戰役從軍 大倉 蒔輪 興 三
同 同 同 平 同 同 井 加 加 蓑 青 山 岩 次
同 同 同 同 同 同 健墨 己 之
日清 日露 兩戰役從軍 佐々木 治郎右衛
日露戰役從軍 金 岩 次
日露戰役從軍 四郎兵

202.
日同同同同同同同同同同
日清
日露戰役從軍
日露
日露戰役從軍
兩戰役從軍

同 同 同 同 同 同 日 日 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 日 日
露 露 戰 戰 從 從 軍 軍

日 清 日 露 兩 戰 戰 從 從 軍 軍

平 同 同 同 同 小 同 同 同 同 田 下 同 同 西 同 同 持 明 寺

井 泉 川 去 大 井

加 伊 小 小 松 加 小 東 青 上 東 仲 加 鈴 吉 股 竹 青 室

棹 潭 宮 藤 潭 井 山 田 井 橋 藤 木 本 部 内 原

藤 藤 竹 松 稔 伊 多 太 宣 太 爲 競 郡 墓 丹 善 善 太

伊 茶 三 松 右 衛 三 宣 太 爲 競 郡 墓 丹 七 左 衛 乙 福

作 藏 郎 吉 門 八 應 郎 七 三 吉 吉 七 門 助 郎 門 吉 松

同 同
因に戰病死者の閲歴及氏名は第一輯にあり、
産業上より見たる吉川村
大平 井
中興 李
助興 本
次之 郎

農業 本村の大半は平坦部である。東部に日野川が流れをり、吉野瀬川を源とする。土地は東部日野川流域は砂壤土、中央部及び西部は、重き粘り氣のある植土又は植原土壤が多い。總面積五百四十五町三反の内、田が四百四十八町九反歩、畠が廿五町五反歩だが、火田の歩ない中央部及西部では、俗にいふ踏作利用即ち田地を一年間畑作にする方法が、古くから行われ、各種蔬菜の栽培が激増し、猶今後増加する状況である。東部の各字では、日野川流域内に相當面積の畠地があつて、蔬菜の栽培に適し、最も牛蒡、長芋、大根等は他區に追隨出來る。立派な作品で、隨て利益も多い。

現在戸数五百二十一戸中、農家戸数は四百十九戸で、耕地面積は一戸當り、田九反三畝歩、畠が四歩で、合計八反七畝歩である。全國における農家一戸當り耕地は約二町歩と云はれてゐるから、本村の耕地は純農村として云は、あまり多い方ではない。畠は田に比して特別少いが、蔬菜栽培は相當世上に認められてゐる。製品の統一、販賣統制等について、本村に於ける耕作地及別から見た農家戸数調査(昭和七年)によると、一町歩未満のもの

が百三十六戸で農家総戸数の三割二分強、一町歩以上二町歩未満が二百五十九戸で、戸数の六割強に當る、前者を全國の耕地面積別農家比率三割三分に比すれば大差ないが、後者を同上の二町歩未満一割九分三厘に比すれば非常の懸隔があり、二町歩以上は僅に十五戸へ内ニ町歩反步以上三戸の總戸数の五分で、全國比率の一割二分に比べて遙に及ばない。しかし本郡に於ては、一町歩未満が三割四分四厘で、本村の比率と比較に及ぶるが、一町歩以上二町歩未満は一割五分八厘で、本村の比率とは比較に及ばない。

要するに本村においては、一町歩以上二町歩未満が耕作者の中堅である、又同年度調査によれば、自作者八十三戸、小作者百廿五戸、自作兼小作者が二百十一戸である、本郡にかゝっては、自作者最も多く、自作兼小作者に次ぎ、小作者最も少ないに拘らず、本村においては自作兼小作者が第一位を占め、純然たる自作者が最下位に拘らず、本村の經濟的方面より見て、大に研究考慮を要する事項ではあるまい。

205.

紫雲英の栽培、本村の二毛作としては全く振はない、唯紫雲英栽培は相當の成績を挙げてゐる、昭和七年度に於けり、本村紫雲英栽培面積は、十五町六反で、水田面積に對して僅かに百分の五であるから、きはめて微々たるものである、元來本村の如き湯田の多い土地では、此の栽培は頗る困難なことであるが、金肥驅馳の上からも、是非普及を計りたい、本村は用水の便もつとも佳良であるから、大なる努力と、綿密なる研究により、人爲的に紫雲英生育に支障なき様、相當乾田化することができ、各字が統一的に栽培をすれば、一層効果を得られる。

205.

莧を主る蔬菜類の生産額は昭和八年度に於いて、馬鈴薯十町歩反歩、三萬三千五百三十二貫へ價格四千六百九十四圓、西仙三町四反歩、二萬三千百二十貫へ價格六千二百四十二圓、生大根十六町五反歩、十三萬。三百五十貫へ價格一萬五千六百四十二圓、胡瓜二町三反歩、一萬二千。七十五貫へ價格二千四百十五圓、マクワウリ三町三反歩、一萬三千八百六十貫へ價格四千百五十八圓、茄子九町七反歩、六萬。百四十貫へ價格八百六十四圓、葱一町一反歩、六千。五十貫へ價格二千七百三十圓、里芋一町九反歩、五千七百九十五貫へ價格千二百十七圓、蓮根三反歩、千四百四十貫へ價格八百六十四圓、牛蒡一町二反歩、七千八百貫へ價格二千七百三十圓、里芋一千七百四十貫へ價格七百六十七圓、南瓜六反歩、三千五百四十貫へ價格五百三十一圓へ等である、猶薺茄、甘籠、蕪、人参等價格二千。七十二圓がある、しかし本村に於ける實收販賣額は此數字以上である。

早熟馬鈴薯 本村田、下川寺兩區に於ける早熟馬鈴薯作りは、雪解け後直ちに種芋を下根し、五月中旬から六月十日頃までには収穫を終り、それから稻作に變る方法で、栽培當初即ち大正三年頃には、反富リニ百圓の収益があつた。其後益一般に普及して、今日では出荷組合を設けて、福井市場で共同販賣を實行するに至つた。昭和六年度に於ては、總販賣量七千貫 買上高千三百三十圓に達してゐる。

206. 製繩 本村における機械製繩は大正七年から始まつた。當時一丸の價格一圓なので、頗る有利な副業視せられ、忽ち村内に普及し、同十年以後多大なる製産額に達し、一产地として認めらるゝ様になつた。加ふるに鶴浦電鉄の開通により最も有利なる位置と判つて、他村より遙に優れた利益を得るに至つた。昭和三年に至り本郡農會に販賣幹部が設けられ、一郡統制下に大商人と直接販賣契約を結び得るようになつた。同五年の生産額は二萬一千四百九十五丸、この價額九千六百七十二圓七十五錢であつたが、同七年に至つては、藁繩價額の下落により、一萬一千五百六十九、此の價格四千・七十三圓九十一錢となつた。製繩に使用する稻藁は一丸につき、凡そ五貫五百目を必要とする。故に及當り藁生産額平均百六十貫として、六十八萬九千七百六十貫の統製産額に對しては、三ヶ年平均生産額が約三割強に達する。是を一般從業者の收入上から見れば最高二百圓位のものである。

製繩取引は前述の如く、本郡農會幹部に一任した結果、仕向地は朝鮮方面であつた。

207. 四分繩の賣行が最も良好であつたが、近來消費地が内地に變更したので、四分繩が

三分繩に變つた。殊に近來製品の高尚化と共に、藁繩の再製事業が勃興したので、本村に於ては、生産品の改善増殖を目的として、組合を組織し、南條式再整機四台を購入し、鋭意努力したため、漸次吉川村製繩の聲價を高め、現今本村においては、吉尾式、菟佐式、仲田式、島式等の製繩機三百三十二臺を使用し、全國的に名聲ある河内繩を凌駕せんと、鋭意努力しつゝある。

吉川村生果出荷組合 事務所は吉川村田區にあつて、組合員七十六名、最初吉川村田、下川寺、持明寺三區聯合青物市場ヒ改稱した。當時の生作物統制状況は桃三町歩、青物踏付三町歩を有し、組合員の個人賣を嚴禁し、必ず市場に出荷せしめ、雨天のため生産物腐敗のそれをあつたり、振賣の必要を生じた場合は、組合役員の鑑査を求める上、振賣をしたもので、當時は相當苦心をしたものである。最初市場出荷振賣代金の一割を徵收して、組合の經費にあてたが、現在は六分乃至四分を徵收し、昭和七年吉川村生果出荷組合と改稱し、資本金を各員から募集積立てた。設立當時の出荷品種は、茄子、胡瓜、西瓜、瓜類、桃等で年産額五千圓程度であつた。組合員の作付状況は桃一人當り五畝歩、蔬菜一人當り、七畝歩乃至五畝歩であつた。昭和七年以來米價暴騰のため減歩した。同下塙なる事業は、共同出荷場設置、共同出荷、共同加工である。販賣方法は多年の経験から市場法により、出荷期は毎年七月六日から八月末日まで、隔日ごとに、出荷場にかゝり、農村では珍らしい、せり市を行つてゐる。朝から午後二時迄商人が、四五十人集り、せり元があつて、調子よく賣倒きゆく有様は、見てみても氣持がよい。昭和七年にかけろこの組合の主なる販賣品の賣上高は、一萬八千九百圓で、作付及別廿七町六反

総生産数量十八萬九千五百貫である。

工業工場 昭和八年の調査によれば染織工場八、飲食物工場一、合計九、職工数百十六人である。

綿織業 機業工戸數十戸 機台数四十八台 職工数三十二人 製造数量四十万八千二百反、價格二萬七千五十九圓。主なる品種は織物無地、及縞木綿である。
絹織業 機業戸数六戸 機台数百二十二台 職工数九十二人、製造價格六萬七千二百圓
主なる品種は、縮緬、かべ、羽二重、絹袖、リボン、絹テー等である。

208.

麻及交織業 機業戸数四戸 機業数四台、織工四人、生産價格千二百九十六圓、主なる品種は小幅物である。
酒造業 製造戸数一 製造價格二萬五千四百五十六圓、品種は清酒及酒粕である。
其他の工業の生産價格は漆器三千百五十圓、木製品二千七百四十圓、竹製品六百五十圓、杞柳製品二千圓 下駄千七百圓 工作物價格總計十四萬三千五百八十三圓で、農產物價格總計約三分の二に相當する。
綿織物は昭和八、九年に於て市場の好景氣によりて、益々隆盛を來たし、二三工場の出張が出来、将来も猶農村進出の傾向が見えろ。職工の鰐江及神明方面へ通勤する者頗る多
人數より見ると、工場の包客には餘裕がある
農業方面にては、春季馬耕の普及と、電動力の使用にて、耕作人走の集約となり、蔬菜類は温床栽培にて、生果の産出は已に坂神地方と競爭するまでに技能熟達して、独り産

米の收穫の增收のみに偏重せざるまでに、多角的農業となつた。

農村文學

明治聖代以後に於ける、農村文學は普通と専門とに論なく、向上發展しは言ふ迄も在
い茲に農村文學と言ふは、明治以前舊幕時代に、寒村僻轍の津々浦々まで、流行し
たのは、芭蕉翁の十七字詩即ち發句である、百姓着そのまゝ鍼頬杖に營の句も出る、蔚
端に秋雨を聞いて一句を拓る、春にも、冬にも、それ／＼の句を作り、性情の發する處
は詩も發句もやはりはない、故に農村文學として、神社・佛閣・に奉納しある廟額を記
載することにした。固より各區にも、今の中学校に相當する、御師匠さんがあつた。本村
では、冬島の寺小屋山品室太支翁へ後に五十嵐良左衛門シがあつて多少の記録も残つて
ゐるが、他の區には其の名を聞かない。下川去區笠原堀兵衛翁は、橘曙覽先生と交遊が
あつたと聞くも記録の據るべきものはないが、相當の學者であつた、著者は或る日、平
等會寺誌要編纂の折、同寺境内の墓碑を調べ、門第中とある左の三基を知つた。

嘉永七年七月 日立之 門弟中 加藤 藤四郎 兵衛 氏 墓
天保四年季春上三日立之 守習門弟中 奥本 興右衛門 氏 墓
天保十四年季九月 日造立之 門弟中 加藤 武右衛門 氏 墓

當今では此のか師匠さんの傳託を誰一人知る者がない惜しい事である。
先づ農村文學としては、唯一の發句である、發句は宗祇の檀林派があつたが、普通發句
と言へば、芭蕉翁である、場所に因んで、越前の芭蕉塚に就いて、一節を書くも徒然か

209.

あさむくや月見の旅の明はあれ
月見せよ玉江の蘆の刈うぬ先
湯の尾塔下

月に名を包みかねてやいもの神

義仲

山

燐

月

に

よし

遊

行

の

も

て

る

砂

の

上

敷賀夜泊

氣比の明神

月

に

よし

遊

行

の

も

て

る

砂

の

上

泊

夜

泊

名

月

や

北

國

日

和

さ

ため

な

き

ま

き

め

る

海

の

底

越前の境松岡の里に北枝と別れ「もの書いて扇ひきすぐ別れかな」の句あり、之よりさき大聖寺近くにて曾良と別れしかば、一人とぼくと永平寺より敷賀に行き、更に迂回して濃州に赴きぬ。つをくの細道の旅は即ち茲に終りぬ。行程凡そ六百有餘里、一第一

は左い。
俳聖芭蕉が元禄七年即ち越前行脚の五年目に五十一歳で「枯野」の遺吟を最後に、浪華の露と化して以来、彼が足跡をといめて名吟を遺したと否とを問はず、全國の俳諧連中は彼の遺徳を追慕する余り、句碑を建立することが流行して來た。寶曆十一年即ち芭蕉、歿後六十八年目に調べ上げた、全國の塚数は凡そ百四十七と、江州栗津の義仲寺へ芭蕉、墳墓地へ藏版の「諸國翁墳記」一巻にのせてある。彼の塚のない國は五畿七道中僅かに十二三箇國、それも調査洩れであつたかも知れぬ。我越前では武生の芭翁塚、福井の櫻塚、敦賀の鐘塚の三基をあげて金津の雨夜を洩してある。

「諸翁墳記」は塚詠の最も古いものである義仲寺では、本廟への申告により時々増補してゐる。在岡山の中國民報社の西村燕々氏の俳句碑巡禮へ平凡社俳句講座特殊研究篇に「文政十一年冬刊行の秋風墳」の序文「されや世に故翁の徳光をあふぐ碑の數をさきに義仲寺の僧がかみへしに海内三百五十箇所と誌せしが乍ほ幾そばくやは加はりぬうん」を引用して全國にむける芭蕉の碑は蓋一千にも及びあらうかといつてある。わが越前の俳壇は芭蕉をはじめとし、蓮二齋元・五竹以哉、その他美濃の宗近連が行脚の際指導した感化の大きいだけ、祖翁の遺徳を追慕し各地に建立した芭翁塚が残存してゐる。(越前の芭翁塚より 石橋重吉先生)

祖翁の越前にての句吟二三を記して見る

浅水の橋をわたる俗にあさうつと云清少納言の橋はと有一條あさむつと書る處とぞ

笠垢衣破襪にて此長距離を歷遊せしなれば、今より二百有餘年前に於ては中々の大遠征といふべし。九月三日大垣如行の家に着せしまで凡そ百六十日を費しけり。

212.

• 213. •

平井三十番神堂奉額

三

四

10

6

平井の里。然てある三十番神の
靈を仰ぐは、おの一句を納めず。此
碑下賜(字跡不明)と云ふ。此の事も
御所の事也。此の事も御所の事也。
此の事も御所の事也。

上川考
永嘉縣志

吉鶴 女
蓮可季素黃芦
祐翠 宏以水由山角

冬島八幡神社奉額

八幡神社

額

明治二十六年
月の運は
かに進むと
心にさへ
やや松の
時の雨

卷之三

飞天
修真山行

春の曙光
月夜の星
夜の月夜
入る月夜
山の月夜
波の月夜

常長泉

東宮春乐
月松署同

觀月山臨心寧池
老樹參天圍古城
青山杜宇哭殘春
四顧萬々絕世緣
堪思避世著書時
誰知兄弟閑牆情
細雨斜風長綠蘋
禪燈半減夜淒然
板扉常鎖人來少
斜陽影淡衣川水
恨殺落花飛若雪
凍猿一、一、一、
板門常鎖人來少
猶帶流離嗚咽聲
如今誰是寥寂人
寒犬數聲霜已堅
纏地烟嵐晝未徂
東久世竹亭
聽雨
文苑
雨
秋
雨
小
雨
泉
雨
下川去
八幡神社奉額
母の咳ゆいて仰らる爲玄
となりにも甚隣ノノも大祀
降りて啼や霞桐
降りての杉や幾千代替わ
に日の移ぬ十畳
色紅
上川去
下川去
市
玄
山
梅林
千岳
松琴
主
淇謹書

くため、區民は思ひ／＼に拜殿に集りて年越をする。酒の肴は酒と交換して呑む、東天漸く微紅となり、鶯聲曉を告ぐるの頃にもなれば、元朝を迎へんものと家に帰る、其何年頃に始まりしか詳でない。

平井の八朔 八朔は各區兵に業を休む、公武年中行事の一、八月一日の節をいふ。又田實の節、田画の節とも云ふ。もと武家より起りて朝庭に及びたるものなれども、起原は詳かでない。平井の八朔は他とは趣がちかつてゐる、法華鎮護の三十番神堂へ八月三十晩一日晩と御燈明を點じ、一山列座の御祈禱がある、一日の正午には古來より祖師堂にて御神酒がある、區全體が集まる、酒には一定の量があり、赤小豆飯とか野菜の二種は定まつてゐる、酒を好む者は別に酒肴を持参するも勝手である。年一度の唯一の集り合ひとて隨分の賑ひさである。

左儀長 神事の一である。もと旧正月の七日又は十五日に行つた。日の丸扇子、五色の紙で色々の飾付をした、十五日に行つた區は十四日年越といひ、若い衆へ當時の名称しは夜通し太鼓を敲き、翌朝左儀長をいや入といつて焼く、所によつては各自に餅をあぶる、之を喰べろと夏やみをせめといふ、今は大分廢れて大方は其形式だけを行ふ様になつた。

よをりへ百燈祭）これも神事の一つである、七月より九月にかけて各區それ／＼に

神前に御供物を奉し御燈明を捧げ、沿道には御神燈を點す、御庭にては踊りをする、而

カをする、冬島などは催し物・花火などもあつた。

三月の雛節句、五月の菖蒲節句、盂蘭盆會、田植休、春秋祭禮などは各區と上同じて

る、寺院所在地では春秋彼岸會、開山忌などの勤行がある。

三月

俗

221. 明治時代に流行せし俗謡は多々あれど、之を記憶するもの多く、茲に集録することが出来

い、無論鄭聲ではあるが時代相を知るのには好資料である、唯僅に四五を知りのみ、

○蓬ひもせなんだか、松原辺でト

○コ一モリ合羽に、三度笠 トコバイトコズイ く、

○藁の着物に、襦子の帶、

○笠を置いて来たか、御獄山の峯に、

上等の

素人か、見てもろか、上等舶來、

雨が降り出た、思ひ出す

○ひとに大事は後生なり、再び逢れぬ今日の日を、むなしく暮すは愚かなり、未來大事と思ふなら、ものにははれをかけさんせ、よきも悪しきもうち捨て、佛の御慈悲に取り繕り、いつまで此の世にゐるものぞ、来未まもりの花の露、無間地獄を落る身をそのまゝ救引蒲陀如来、奈落へ沈む女人まで、虎せまいとの御誓願、山ほど金銀あると

天文八亥年六月吉日

(織田信長時代)

万延山光明寺正代訪人南部吉助

寺村の西の山は寺山といひ、全山に堂塔伽藍があつて、光明寺も其一つであつた。後川去に移転し、鷺田姓も此處より別家せしともいふ。光明寺——鷺田姓、此陶の谷郷と何等か關係あるかとも思ふ、然し万延山と龍勝山とは、山號に於て相違せらるあり、後日の研究に俟つこととする。

224.

附記 寺山は古ヘ泰澄大師末流の寺院

長華寺、西福寺、國瑞院西福寺、文殊院

西福寺、法華寺、宗恩寺へ今ヘ徳永寺、淨念寺へ今ヘ念正寺等一山地に十一ヶ坊アリシ所ナリト云フ、其の外に八幡宮、般若堂、帝釋堂、毘沙門堂、藥師堂、文殊院

堂、大將軍神堂等の神祠、佛堂ありたりと。

西福寺 天台宗真盛派、越前國武生町引接寺末

本尊阿彌陀如來元本尊觀世音菩薩は泰澄大師の直作

脇士尊大觀音菩薩

由緒當寺義は千有餘年の古寺にて、開基の祖師並昇月等相繼カリ不申往古泰澄大師直作の千手觀音菩薩を本尊とし、雲井山文殊院西福寺と称し、一山地にて坊舍十一年ヶ寺、各々に立列し寺領二千石余り有之尚只今も伽藍跡多く遺れり。其の山を寺山と唱へ、又隣峰を經ヶ塚と云ひ且當今各中の總社産神禪官は往昔當寺の鎮守にて深き由緒有之。社頭之鍵代々住持預之、歲々の神祭旦暮宮、改造等の

節、皆々當寺の街にありたる處、門徒の一揆舟火の爲に類亡し、中古當今の處に、右の本尊觀世音菩薩を安置す。門前減罪檀家二十五軒取扱來、天台律宗に皈入し、山門西教寺末派に相成云々、へ宮崎村誌 司辻生著より

225.

編集後記

本編最初の計畫では、体裁を整ひ、順序を正ふし、相當の整備をするつもりであつたが、何分材料の蒐集、及調査研究に於て、前後せしあり、又謄写後捨て難き資料を寄せうる要するに本編は郷土研究資料といふ範囲に於て記録しました、郷土研究に就きましたは卷頭「編輯に就て」にて、二三事項を記しましたが、郷土愛は其究極する處、今日地方自治に關係が、最も密接であると思ふのであります。

郷土愛は其環境に於て、大小の差はある、世界を家と爲すも、男兒の豪懷である、これは事業目的の上に於ての狀態であつて、古今東西の英雄又望郷の念があつた、これも郷土愛の一種であろう。

挿入の古繪圖は、其大体を模写せるもの、原圖とは多少の相違は保し難い。

書中誤字、脱字等勘定からず、讀者各位に於て御訂正御判讀を御願する。

引用の書籍名は大抵記入せしも、猶脱落せし箇所もあることを、申上けて置きます。

本文中首尾徹底せざる處多々あり、これは第一輯各項の補遺といふ部分もあり、挿入の記事もある關係上にて、前輯後参照ありたし。

往復商買も出来る。何も彼も世界的になつた、然し世界的に至ればなるほど、我等は郷土的に立ち必要がある。我郷土は、吾家の稍擴大せられたるもの。吾國は吾家の更に擴大せられたるもの。愛國の第一歩は、愛郷土より始まるといふも過言ではない。郷土愛と地方自治とは斯くの如くにして、密接の關係を生ずる。吾等祖先の遺業を保護し吾等祖先の土地を親愛して、昭和聖代の國恩に報するこそ、日本帝國々民の大なる責務である。

此の一小冊子は、聊かなりとも、此が裨益することを期したもの。其体裁を採らすして其眞實を採り、意義あらしむることを、御願ひします。

226.

何人も吾家を粗末にする者はない。若し我等が、我等の郷里を、吾家同様に思はゞ、郷里の自治体は、自然に健康に、自然に潔白に、自然に清潔となるのである。今日の地方自治に生命を吹き込まんとする者あうば、何よりも先づ郷土愛を高調せねばなりません。之に反して地方自治体の腐敗は、郷土愛の缺乏とも云へる。郷土愛無き自治体は、機械的自治体も同様だ。近來物質文明の憧憬によりて、都會集中の熱が、また／＼減退して居うぬ。文明愛好は人情よりすろも、國家的觀念より考ふるも、進取の氣象ではあり。農村の疲弊呼ぼりをして阻止するまでもないが、唯懶むらくは此觀念の根本に於て、誤れゐ思想があるからである。利を追ふて趨る處には、決して愛といふものがない。自治体より言へば郷土愛かないのである。都會に自治体の完全ならざるも、郷土愛のなき者の集りが多いからであろう。

郷土愛は決して偏狭なるものではない。郷土愛は必ずしも一村、一町、一市に限つた二とではない。歴史的に生長し、地理的に結合し、生活的に關聯したる、區域に於ける愛着も亦た郷土愛である。此の意味に於て考ふるも、農村の疲弊、都會集中などは、今日に於て地方自治が大に考慮して、覺悟と施設とを要する。老壯の人はさて措き、有爲青年の人々も、生活の場所を都會に求めずして、農村の維持者として、必ず郷土に踏み留りて、研究の出来た學術技術を実地に行ひて、亦此によりて趣味にも應用して、やがて國家を脊負ふ堅実なる地方農村を作り上げ、郷土愛に生きる地方自治を切望する。

進んで此を廣義に解釋して見る、今日交通の發達は世界を縮小せし感がある。朝に東京の花を眺めて晩に滿洲の月下にあらなどは、易々たる旅行となつた、大阪に經由に相互

吉川村郷土誌

第二輯

昭和十年十月一日發行

(非賣品)

福井縣丹生郡吉川村平井第五十二號三番地

発行人兼

福井縣加

藤吉眞

一

福井市矢矢町九十六番地

編輯人兼

福井縣加

藤吉眞

一

印 刷 所

加 藤

八 之 丞

代 権 写

福井縣丹生郡吉川村大倉第五號十五番地

發行所

吉 川 村

役 場

356

255

終

